



「敗戦古稀 其二」二〇一六年 94×60cm 墨紙

■主催 認定特定非営利活動法人新潟絵屋 ■共催 新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体(砂丘館指定管理者)
■協賛 八海醸造株式会社、名古屋画廊、雪国あられ株式会社、NSGグループ、株式会社イシカワ、株式会社新潟ビルサービス、丸屋本店、株式会社藤田金属、新潟・市民映画館シネ・ウインド、郷土の文化に親しむ会
■協力 NSG美術館 ■助成 朝日新聞文化財団、花王芸術・科学財団

書の意味を、歴史を、苦を、愉を、現在を、問い続けるひと

石川九楊展

私は思う、現在、書にかかわる者は、将に書にかかわることを耻辱とし、その耻辱を拠所として、それを克服する方向を追求しつつ、書作しななければならない、と。

二〇二三年二月一六日(水)―三月二七日(日) 観覧無料

九時―十九時(三月は二時まで)
休館日 月曜日(三月二日は開館)、二月二四日、三月二日

砂丘館

旧日本銀行新潟支店長役宅

受苦と琥珀

大倉宏

二〇一九年の名古屋の古川美術館で石川九楊の書をはじめて目にして、ふしぎな衝撃を受けた。それらが書、言葉を書いたものであるというのも確かに意外だったけれど、全体を見終えたあとに残った印象が消えないしみのように記憶にくいこんでくる感じに胸をつかれた。

名古屋画廊の中山真一氏の紹介で東京でお会いしたのがその一年後。その折にいただいた新著『河東碧梧桐―表現の永続革命』にまた痛打された。正岡子規との出会いという原点を生きたため俳句の表現を更新しつづけた河東の人生がその書とひとつだったという事実を差し込まれて、足許が揺れ、自分の書く字(書)が変わってしまふという体験をした。

翌春、砂丘館を直接見てもらい、ギヤラリー(蔵)に二〇〇〇年代の自身の言葉を書いた作品に李賀の詩を加え展示することに決まったのが秋だった。その間膨大な著書から一冊、一冊と読んでいた。多くを読めなかったのは、書についての私の基礎教養の不足に加え、そこに埋まっている剣に絶えず切られながらの読書だったから。夢で男に追われ銃で撃たれそうになったが、男は石川だと思った。

最新著「思想をよむ、人をよむ、時代をよむ。書ほどやさしいものはない」を読んでほどなく、新潟のある旧家の書架にあったという石川のお厚い作品集を知人が届けてくれた。一九八七年刊行のその本の巻末には吉本隆明、八木俊樹の石川論と石川自身の書論の一〇一の「断章」が載っている。「芸術は何よりも政治と闘わなければならない。政治が本来芸術に従属しなければならない。あるいは政治が芸術化しなければならないのに対して、現在では、芸術が政治に従属しているという厳然たる事実がある以上、ましてなおさらのことである」「国家≡政治に衝突することのない芸術は真の芸術ではない」「私は思う、現在、書にかかわる者は、将に書にかかわることを耻辱とし、その耻辱を提所として、それを克服する方向を追求しつつ、書作しなければならぬ、と」などの少しあとに「伝統芸術の運動とは、前近代への回帰的陰謀を乗り越える闘いであると同時に、近代化を乗り越える闘いでもある。いわば、永続革命なのだ」があった。一九七〇年のこの言葉が半世紀後、河東碧梧桐伝の副題となったことに気づいたとき、二五歳の石川が自らを打ち込んだその位置にい続けることによつて河東というもう一人の自分に会えたのだということを知った。

その瞬間、浮かんだのが受苦ということだった。古川美術館の消えない印象は、受苦だったのだ。新潟という東京文化の植民地に往処を決めて、その町が崩壊するにまかせてきた古い木造の家で今の表現を紹介することを続けてきた私の受苦があつたとき石川の書に照らされていた。

古川美術館のあとに見た爲三郎記念館(一九三四年建築の古川爲三郎の数寄屋造りの旧宅)での展示では、石川の違う面を体験した。書は音楽と同じ時間芸術だと石川は書いている。眺め、なかに入り、部屋をめぐり、そこに佇むことのできる家≡建築もそうだろう。八五年前の木の家で見た石川の書は楽しかった。古今のさまざまな書の「十」から人を、時代を読んでいく石川の言葉に、生まれながらの書を読む(聴く)こと好きを感じる。碧梧桐がそうだったようにこの好、愉の感情こそが言葉を書くという受苦の場所に石川を不動たらしめてきたのだろう。

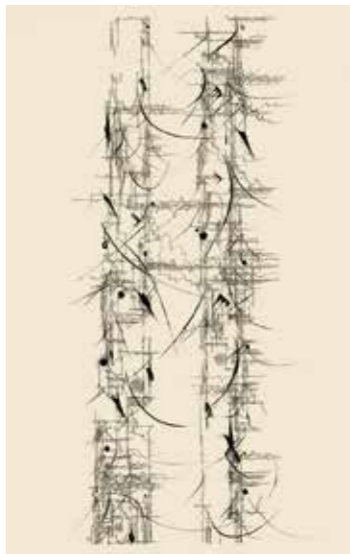
二〇〇〇年代の書は一部をのぞき、現代を撃ち、斬る石川自身の言葉が書かれている。日本語の源流である中国の文字・書は誕生時から政治と不可分だった(あるいは政治そのものだった)し、書家として知られる人々の多くは中国でも日本でも時代と切りむすぶ人生を生きたことを石川の著書に改めて教えられた。歴史に置いてみるならまっとうな書である。古い書と同じように同時代のこの書もやはり読めない――と思いつつながらふしぎなわめきに揺れる線の森に目を沈めるとふつと言葉が見える、聞こえる、というはじめての経験に愉しい興奮を感じた。書はおもしろい。

二〇一〇年代以降石川は新潟の酒、八海山のラベルの書を書いている。どれも魅力的だが、ことに浩和蔵仕込み純米大吟醸の八海山は、そびえたつ山から濃い酒が滴ってくるようだ。傑作「李賀詩 将進酒」のように石川九楊が受苦の底に見出した琥珀がゆれている。(砂丘館館長)

「李賀詩 将進酒 No.2」1992年 23×230cm 墨、紙



「九月十一日晴一垂直線と水平線の物語 I (上.)」2002年 95×60cm 墨、紙



「九月十一日晴一垂直線と水平線の物語 I (中.)」2002年 95×60cm 墨、紙



「9・11事件以後 I」2004年 94×60cm 墨、紙



「9・11事件以後 II」2004年 94×60cm 墨、紙

石川九楊 いしかわ きゅうよう

書家・評論家。京都精華大学教授・同文字文明研究所所長を経て現在、同大学名誉教授。昭和二〇(一九四五)年、福井県今立町に生まれ武生市(現・越前市)で育つ。京都大学法学部(現・越前市)に入学。進学にあたり、書の師より九頭竜川にちなみ「九楊」の名を与えられる。昭和四二(一九六七)年、京都大学卒業後、三洋化成株式会社(京都市)入社。同五三(一九七八)年、一年間の会社員生活に終止符を打ち書家として独立。以来、作品制作と執筆活動に専念、いずれの分野でも最前線の世界大の表現と論考を続け、現在まで書作品一〇〇〇点、著作一〇〇冊以上を世に送り出した。主な展覧会に「書だ！石川九楊展」上野の森美術館 二〇一七年、「石川九楊展」古川美術館・為三郎記念館 二〇一九年、「ドロイイングの可能性」(東京都現代美術館 二〇二〇年)「石川九楊の世界 書という文学への旅」福井県ふるさと文学館 二〇二〇(二一年)など。

主な著作

- 『書の終焉』一九九〇年 同朋舎出版 サントリー学芸賞
- 『筆蝕の構造 書くことの現象学』一九九二年 筑摩書房
- 『日本書史』二〇〇二年 名古屋大学出版会 毎日出版文化賞
- 『近代書史』二〇〇九年 名古屋大学出版会 大佛次郎賞
- 『石川九楊著作集』全十二巻 二〇一六―一七年 ミネルヴァ書房
- 『河東碧梧桐―表現の永続革命』二〇一九年 文藝春秋
- 『石川九楊自伝記録』二〇一九年 左右社
- 『俳句の臨界―碧梧桐一〇九句選』二〇二三年二月 左右社(予定)

関連企画

石川九楊 講演会「良寛の書を語る」

二〇二三年三月一七日(木) 一四時―一五時半
会場 新潟市民プラザ 新潟市中央区西堀通六八六六 NEXT21:六階

参加料 一五〇〇円
定員 一〇〇名

申し込み 砂丘館
●電話・ファックス 02552222・2676
●メール yoyaku@bz0.jp/aiar.jp

申し込み受付開始 二月九日(水)
*参加の際はマスクの常時着用をお願いいたします。当日は検温を実施させていただきます。

主催 認定特定非営利活動法人新潟絵屋
共催 新潟絵屋・新潟ビルサービズ 特定共同企業体 (砂丘館指定管理者)

同時期開催

石川九楊展

二月一六日(水)―二七日(日)
三月一六日(水)―二九日(火)
一―一八時(各最終日は一七時まで)

会場 新潟絵屋
新潟市中央区上大川前通一〇一八六四

主催 認定特定非営利活動法人新潟絵屋

砂丘館 新潟市中央区西大畑町五二一八・一
新潟駅万代口より、浜浦町線C2系統又は
観光循環バス「西大畑坂上」下車徒歩一分
。駐車場はありません。周辺の道路は駐車禁止です。
公共交通機関をご利用ください。
新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は、駐車券
提示にて時間分の無料券を差し上げます。